



Title	概念と教養
Author(s)	内野, 花
Citation	Communication-Design 特別号. 2016, 1, p. 24-31
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/55644
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

概念と教養

内野 花

— KEYWORDS

教養

概念

— AUTHOR

内野 花 | Hanna Uchino

コミュニケーションデザイン部門 特任講師

専門は、東アジア産科学の史的・研究。妊娠・出産をめぐる事象、およびその背景にある生命観・性概念について、伝統医学や現代西洋医学、産科習俗、民族説話などを媒介に紐とく。博物館学芸事務職員や高等学校講師を経て現職。

立場や利害が一致しない人、所属分野の異なる人とコミュニケーションを持つとき、それぞれの概念の違いが原因となって齟齬をきたしたり、誤解や矛盾を生んだりすることがあります。しかし、慣れ親しんだ人々や仕事、環境における日常生活では、最初は鮮明であった概念の違いもすぐに同質化したり、折り合いをつけたりするようになり、違いが存在していたことも風化していきます。また、同じ概念を持つ人同士で付き合い合うほうが、当然のことながら衝突することは少なく、ストレスに感じることも少ないため、違う概念を持つ人と必要以上に接触することを避けるでしょう。学生の頃はまだしも、社会人になって働き出すと、付き合い人や環境はより限定されたものになっていきます。その結果、概念は固定、単一のものになり、どんな単語であっても、どんな話であっても、同じイメージ・概念を浮かべるはずだと思い、自分と同じイメージ・概念を抱かない相手を敬遠したり、攻撃・軽視したりする傾向があります。また、経験を積んでいる、慣れ親しんでいる分野では、知識や知恵、経験も豊富にあるがゆえに、「専門だから。」「知っているから。」とその分野での変化に気が付かなかったり、知識をアップデートしなかつたりすることも起こります。しかし、同じ単語であっても、人によって、また状況、時代によっても概念は異なるということ、概念をはじめ、どんなものでも常にアップデートしているということを心の片隅に置いていけば、何かしら新しい発見があり、コミュニケーション時の衝突や不具合を和らげることが可能になるかもしれません。

異なる概念と巡り合うということは、異なる価値観を理解することにもなるため、楽しい反面、ストレスにもなりますが、いままで知らなかった考え方に巡り合えるチャンスでもあります。新しい価値観を理解することは、新しい分野の勉強を始めるのと同じぐらいの労力が必要になることもあります。しかし、専門知識で頭が満たされる前の、白紙の空間が多いときに足を踏み入れたほうが、より少ない労力と短い時間で、新しい価値観とうまく付き合い合うコツをつかむことができます。

当センターの3つのミッションの1つ、人材育成として私が担当している授業では、「概念」について、毎回設定したテーマにまつわるあらゆる概念、そしてそこから派生しうる事象を、歴史的観点から取り扱います。ここでは、授業で必ず取り上げるテーマ「教養とは何か」について、お話しします。

「教養とは何ですか。または教養のある人とはどんな人ですか。」

これは学生が一番悩むテーマですが、数コマ時間を使うことにしています。授業ではテーマを問わず、互いの意見に共感したり驚いたり、「そんな概念がありえるのか。」と

懐疑的になったりと学生の反応もさまざまで、なかには「概念は変わるし、変えてもよかったんだ。」とほっとした表情になる人もいます。教養をテーマにした授業では、毎年度ほぼ最初に「知識や知恵が教養で、それが豊富な人が教養のある人」という答えが出てきます。大学の、いわゆる一般教養科目と総称される必修科目が「教養」のイメージとして強いからでしょうか。その答えが出ると、みんな安心したように「答えはもう出たけれど、一体何をするの？」という表情をします。「ならば、知識や知恵とは何？あなたがた自身のことばで説明をして。」と言うと、不意打ちを受けたように目をまん丸にしたり、睨みつけてきたり、帰りたいと項垂れたりとさまざまですが、戸惑いながらも考えはじめます。ただただ、学生にひたすら考えさせます。5分、10分と沈黙の時間が続いたあとに、誰かが口火を切り、各々が思い思いに話しはじめてくれます。専門知識以外に知識が専門知識と同等にある人。文化や歴史を知っている人。どんな人とも世間話ができる人。初対面の人と普通に話せる人。相手を不快にさせない人。学歴や社会的地位以外で人と付き合える人。肩書きなしで暮らせる人。家庭の主婦／主夫。経済や社会の変化がわかる人。子育てしている／経験した人。常識のある人。美しい所作の人。TPOに応じたマナーを心得ている人。日常生活に必要なと思われていることや数値化できないことでも知っている人。相手をリスペクトできる人。サバイバル能力のある人。自分のことばでならこう言う、自分ならこう定義すると、次から次へと答えが返ってきます。そこで、こうも聞いてみます。

「リベラル・アーツとは何ですか。」

すると、たいていの学生は「聞いたことはあるけれど、何それ？」「たしか、『教養』のことじゃなかったっけ？ 違うの？」という表情を浮かべます。そこで、教科書のような答えではなく、自分のことばで答えてもらうために、辞書（Oxford Dictionary, 8th edition）に載っているリベラル・アーツの「定義」を、サイエンスやヒューマニティーズとともに紹介します。

Liberal arts: noun [plural] (especially North American English) subjects of study that develop students' general knowledge and ability to think, rather than their technical skills

Science: noun 1. [Uncountable noun] knowledge about the structure and behaviour

of the natural and physical world, based on facts that you can prove, for example by experiments

2. [U] the study of science

3. [U, Countable noun] a particular branch of science

*compare ART (6), HUMANITIES

4. [singular] a system for organizing the knowledge about a particular subject, especially one concerned with aspects of human behaviour or society

*Art: noun, verb 6. [Countable noun, usually plural] the subjects you can study at school or university that are not scientific, such as languages, history or literature

*(the) humanities:[plural] the subjects of study that are concerned with the way people think and behave, for example literature, language, history and philosophy

ホワイトボードに辞書の定義を書いた途端、語学には興味がないとばかりにつまらなそうな顔をし、ことばの定義は辞書のもので十分だと言う学生もいます。たしかに辞書に記載されていることばの定義は、その時代に生きる誰もが賛同できるものです。一旦自分の慣れ親しんだことばで定義してみる。それが辞書の定義と全く同じであることもあるでしょう。しかし、一度は自分のことばで定義してみない限り、それはいつまでたってもお仕着せの定義であって、自分のものとして獲得したことにはなりません。自分のことばで表現することで、あやふやだったものが明確なものになることもあります。そのため、学生には、できる限り、普段日常で使っている自分のことばで定義するように言います。

さて、辞書の定義を紹介すると、大半は自分が思っていた定義と違っているようで、自分の専門分野がサイエンスとヒューマニティーズのどちらに分類されるのかを考えはじめます。法学や経済学などの学生が「私が勉強しているのはサイエンスになるの？ウソでしょ？」と真っ先にショックを受けます。リベラル・アーツがあっちはじめてサイエンスが成り立つことも理解します。そして、ほとんどの学生が少しずつ、自分たちの概念がすべてではないこと、同じ人であっても概念が変わっていくことを、他のテーマを通して感じ取っていきます。

「美」をテーマにすると、それが顕著になります。日本の女性美の歴史の変遷一つを例に挙げても、ほんの数十年前、さらには何百年前とでは、概念が変化していることを見て、感嘆の声を上げる学生もいます。学生は、抽象的なことばで自分の「美」の概念を説明したり、具体的な例を挙げたりしながら、自分の考える定義を披露していきます。たとえば、工学系の学生のほとんどは「円と球」と答えてくれます。すると、他の

学部から「三角や立方体は美にはならないの？ 私はどの図形も立体も美だと思う。」と疑問が出ます。理論ではありうるけれど、完全な円や球は技術的に作りえない。だからこそ究極の美。それを聞くと「あの子の概念、思っていたよりも深い。」と学生たちは興奮します。反対に、「醜ですら美」という学生の概念を聞くと、学生の大半はその概念に反発を覚える自分に煩悶します。「わかんねーよ。理解できない自分にムカつく、くそお！」と声を荒げながら理解しようとする学生もいれば、ただじっと考え続ける学生もいます。眉間にしわを寄せながら考えたり、「この授業を受けると腹減ります。」と出席票に書いたり、自分にはなかった概念を知ろうとする学生がいる一方で、残念ながら考える素振りをしているだけの学生もいます。もちろん、他の学生が言う定義をすべて受け入れなさいと言っているわけではありません。ただ、闇雲に否定したり、自分の価値観で曲解したりしないよう、相手の概念を相手の言う価値観で理解してみるよう求めています。

自分にない概念を理解しようと自分に強いることは、サイズの合わないジャケットを無理やり着るようで、気持ちが悪く感じると思います。しかし、なかには少しサイズは違うけれど、似合うデザイン／色のジャケットに出会えるかもしれません。もしかしたら、いままで愛用していたジャケットが急に着心地が悪くなるかもしれませんし、嫌いになるかもしれません。嫌いだったはずのデザイン／色が好きになるかもしれません。また、古いジャケットをまた着てみたくなるかもしれません。概念は1つではない、TPOに応じて変化する、自分の概念も必要に応じて変えればいい。こう話をすると「では、どうすれば多くの概念を体感したり、獲得したりできますか。」と問いが学生から必ず出てきます。

「概念をひろげるには？」

どうすればいいのか、そう学生は問いをこちらに投げかけますが、彼らの表情を見る限り、答えを見つけているように毎年感じます。「あなたはどう思うの？」と聞かされると、「『教養』をできるだけ身につける、みたいな感じですか？ 何でも『教養』になりうることはわかっているけど、範囲が広すぎて、何をどこまですればいいのか。」と戸惑いがあることを打ち明けてくれます。人間は生きている間じゅうずっと学び続けることができますが、たとえ他の人の倍の時間を過ごすことができるとしても、すべてを知ることには叶いません。また、なかには理解の域を完全に超えているものがあるかもしれません。あなたの信条に反するものかもしれません。どれだけ時間と労力をかけても二

進も三進もいかない分野があるかもしれません。しかし、概念の1つ1つは、その人の経験や知識、知恵、その概念を獲得したときの社会文化などから作り出されていきます。知識として知っていても経験していなければ理解できない概念、指摘されないと気づかない概念もあるでしょう。それならば、時間と労力に見合わないものに興味はない、新しい概念なんかいらぬという選択をするかもしれません。その選択が悪いとは言いませんが、人もモノも時代も変わるものです。一度獲得した概念で、いままで変わったことがないという概念はほとんどないでしょう。新しい自分に出会うチャンスを手に入れたいとは思いませんか。

どんな人にも、得手・不得手はあります。本や映画は全般的に好きでも、推理ものやノンフィクション以外はあまり見ないという人もいるでしょう。音楽ならばロックは好きでもカントリーはいま一つ、スポーツも水泳はするけれど球技には興味がないかもしれません。私／あの子は〇〇のタイプだから、と型にはめて考えたり行動したりすることは楽です。そのほうが、自分の不得手なことや未知の事象に遭遇することも少なくなりますし、周囲の人々もそれ相応の対応をしてくれるでしょう。何よりも、自分の概念を更新せずに済みます。概念は価値観でもある、と最初にお話ししましたとおり、概念は価値観という名前のフィルターを作ります。どんな人であれ、何らかの形でフィルター越しに物事を判断しています。このフィルターはあなたの考えを強固にし、迅速に判断できるようにするものであると同時に、あなたの思考や行動の幅を狭めてしまう力も持ち合わせています。

得意分野を伸ばしていくことは、苦手なものに取り組むより楽しみも多く、容易に感じます。だからといって、苦手な分野は放置のままでは、概念そのものがアンバランスになってしまいます。そして、知らないこと、不案内なことであっても、外観や枠組みが似ているものに対する概念を引き合いにして、そぐわないフィルター越しに判断を下してしまうかもしれません。興味を抱けないものに向き合うことは、たしかにストレスでしかありません。しかし、その興味の有無ですら、あなたの経験や知識などから作り出されたものであり、ただの思い込みかもしれません。思い込みや先入観はフィルターに勝手に彩色を施してしまう手強いもので、あなたの五感と感情に作用します。普段以上に敏感になったり、鈍感になったりもします。フィルターを取り外すことは、並大抵では成しえませんが、フィルターの数や付いてしまった色で思い悩むぐらいならば、フィルターの数を増やしてみませんか。

教養をひろげる、というとは、文学作品を読んだり、伝統文化を学んだり、名画を鑑賞したりすることだけを思い浮かべてしまうかもしれません。けれど、学生の言う「教養のある人」の定義を見てみてください。過去や現在だけでなく、未来についてまでも学ぶことができるものが教養です。授業を重ねるにつれて、「古典や宗教をわかっている人、専門的な話ができる人だけが教養がある人だ」と思っていた。私はアニメや気象には

詳しくないし、なくても普段の生活には困りはしないけれど、それを話題にして会話したり、経済変化を予測したりできる人を見ると、本当に教養があると思えるようになってきた。」と学生は変わっていきます。新しい環境は不安だけれど、いろんなことを見聞きして自分の可能性をひろげたいと、海外での学業を選択した学生もいます。学問だけではありません、どんなテーマ、どんな分野であれ、慣れ親しんだ物事であれ、まずは色のない状態で足を踏み入れてみてください。経験できるものは全身をつかって経験してみてください。その分野に関してあなたが世界の第一人者かもしれません。ですが、きっとあなたが見落としていたものがあると思います。自分だけが新しい概念を手に入れて変わっていくのではなく、他の人も同様に変わっていくのです。場合によっては、あなただけがその変化に気がついていないかもしれません。また、社会変化や流行によって、それまで教養とされてきたものが、常識に変わることもあります。2015年のワールドカップでの日本チームの健闘以降、以前は一部の人にしか知られていなかったラグビーのルールが今ではほとんどの人が知っている常識になりつつあるのがその例です。

何から始めればいいのか思いつかない、そう思うのならば、図書館に行って新聞を毎日決めた欄、面なり、ネット上の見出しニュースを読んでみてください。読むのが億劫ならば、記事の標題をざっと見るだけでも構いません。各新聞社の元日の新聞すべてに目を通す。本屋の売れ筋ランキングやネットの検索ランキングを見る。官公庁や日銀が発行する各種白書や各国首脳の所信表明演説を読む。円相場や株式相場の推移を見る。コンビニエンスストアやスーパーで商品の入れ換えや値段の推移を見る。ジャンルを問わずに本・映画・漫画・音楽・舞台・コンサート・展覧会などを100作品以上観る／読む／聴く。外国語を学ぶ。必ず、何かが見えてきます。その時こそ、あなたの新しい概念、価値観、フィルターが生まれています。

